中年期女性のアイデンティティ研究に関する一考察

—結婚・夫婦関係を中心に—

教育心理学コース　東　原　麻奈美

A Review about research of a middle-years woman's identity :
from Marriage and the Husband-and-Wife relation

Manami TSUKAHARA

In Japan, present-day, a middle-years women experience various crises. Although the husband-and-wife relation of the middle years included various crises especially, concern was not paid related how to female identity until now. It reviews by this paper focusing on the marriage and husband-and-wife-related way that should be and the portion what influence they bring a middle-years woman. Various crises which a middle-years woman experiences first of all are surveyed, and, next, husband-and-wife-related research is surveyed. After summarizing research of the research on the degree of satisfaction, the identity research based on relationships, the directivity desired in this domain from now on is shown.

目　次

1　中年期女性が経験する揺らぎ
A　心理的・身体的状況
B　ライフコースの多様化
C　離婚率の増加
D　まとめ
2　中年期の結婚・夫婦関係に関する研究の方向性
A　家族社会学における夫婦関係研究
B　満足度に関するもの
C　アイデンティティの形成に関するもの
D　関係性に基づいたアイデンティティに関するもの
E　まとめ
3　今後の課題
A　質的研究の必要性
B　文化的要因を探る必要性

1　中年期女性が経験する揺らぎ

現代の日本において，中年期女性の置かれた状況は不安定なものである。元来の身体的危機，家族サイクル的危機，心理的危機に加え，現代の日本ならではの揺らぎが最も影響する世代の1つであるからだ。

人生において，青年期におけるアイデンティティ形成と，中年期におけるアイデンティティの再構成は，最も大きな危機であるとともに，発達のチャンスであると言われている(岡本，1999)[1]。中年期女性は，ライフコースの多様化や離婚率の増加など現代ならではの現象に囲まれ，先達の無い道を歩みながらのアイデンティティ再構成を行うこととなる。各々が新たな，個別の悩みを抱えながらの自己確立を行っていくことになる。このステージで特に重要となるものは「関係性」であり，例えば子どもとの関係，両親との関係，夫との関係が徐々に，或いは劇的に変化していくなかでの自分のあり方を，絶えず問うていくことになる。本論文では，様々な「関係性」のうち，夫との関係に着目したい。これは，現代の中年期夫婦を取り巻く現象の中でも，変化の激しい要素のひとつが結婚・夫婦関係であることを理由とする。そして，前述の離婚の増加や，中年期の妻の夫に対する満足感が顕著に低いといわれていること(菅原，詫摩，1997)[2]等から，中年期女性にとって夫婦関係が安全基地とはなり得ないかもしれない，という危惧を込めてのことである。

以上より本論文では，結婚・夫婦関係のありようと，それらは中年期女性のアイデンティティにどういった

影響をもたらしうるのか，中年期女性はどういった影響を受けていると認知しているのか，といった部分に焦点を当ててレビューして行きたい。つまり，中年期女性の中でも既婚者に関する研究のみを扱う。図1は，数ある女性のアイデンティティに関する研究のうち，本レビューで扱う領域に相当するものを図示するため，岡本(1999)[1]の“女性のアイデンティティ発達に関する研究の広がり”を参考に，筆者が作成したものである。

まずは，中年期女性がいかなる心理的・社会的・身体的状況にさらされているのか，その揺らぎについて概観したうえで，日本に於ける結婚・夫婦関係に関する研究を概観し，前述の視点からの考察を試みたい。

A　心理的・身体的状況

まず，中年期の女性にとって，元来言われてきている危機について触れる。

岡本(1985)[3]によれば，中年期は体力の衰え，体調の変化という身体感覚の変化，時間的展望のせばまりと逆転，生産性における限界感の認識，老いと死への不安，といった否定的変化を感じ始めるという危機にさらされる。このような否定的な自己認識は，人生そのものに揺さぶりをかける，すなわちアイデンティティの危機の来訪となる。女性にはそれに加え更年期特有の不調が発生する。すなわち，生殖機能の終了と，それに伴う不安定感，だるさや発汗，抑うつ感，といった心身ともに不調な状態となるのである。

さらに，家族サイクルの面においても危機は訪れる。子どもが自立し，離家に至る時期，そして自身の両親の死が訪れる時期でもあり，それまでろくに向き合わなかった夫と二人で過ごす時間が増え，互いに老後について考えはじめる時期でもある。子どもの離家から生じる空虚感は，空の巣症候群と結びつきやすく，メンタルヘルス上の危険因子も多いことが指摘されている。このように，元来指摘されている危機だけでもさまざまあり，中年期女性はこれらを無事乗り越えられるか，成熟か退行か，という岐路に立たされ，個人の資質及び周囲との関係性といった資源の豊かさを強く問われる時期なのである。

B　ライフコースの多様化

現代を象徴する大きな揺らぎの一因としてあげられることは，ライフコースが多様化していることである。かつては結婚し子供を産み家事をする，という生き方が典型であったが，昭和に入ると徐々に女性のライフサイクルは変化を遂げていった。90年代には専業主婦

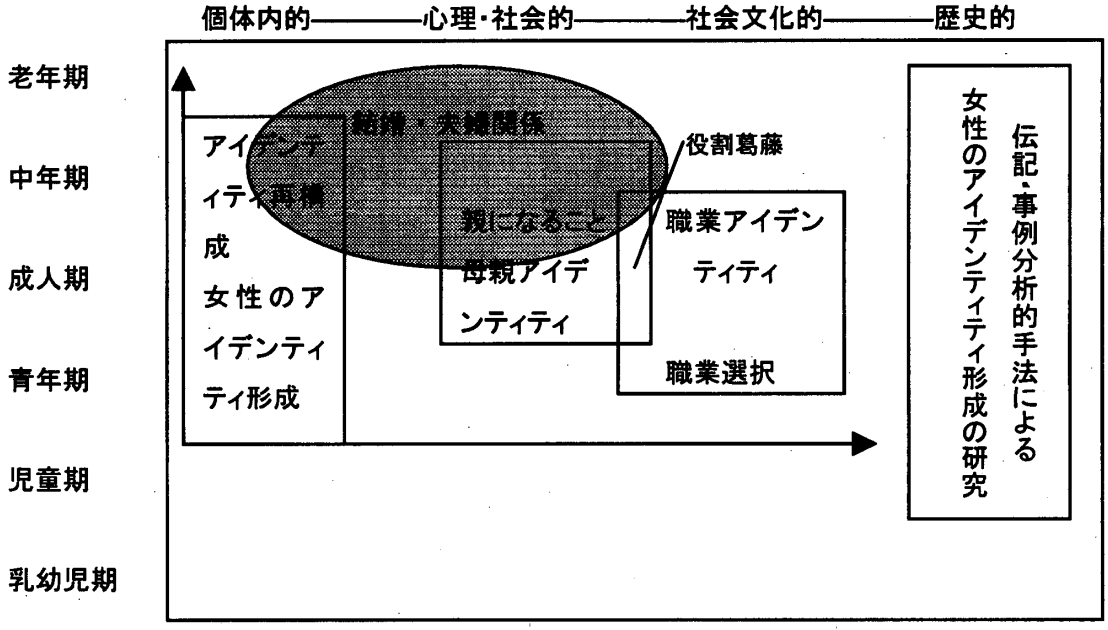

図1　女性のアイデンティティ発達研究における本論文の位置づけ

の生き方は多数派ではなくなり(井上・江原，2000)[4]，多様なライフコースが出現した。ライフコースとしては「非婚就業継続」，「DINKS コース」,「両立コース」,「再就職コース」,「専業主婦コース」があり，さらに，結婚により仕事を辞める・出産により仕事を辞める専業主婦と，再就職コースにおいても結婚により仕事を辞める・出産により仕事を辞める2パターンがそれぞれ存在する。実際にどのコースを女性が歩むかといえば，35歳未満の女性の理想としては「専業主婦コース」，予定としては「再就職コース」を選択したものが一番多くなっている(厚生省人口問題研究所，1994)。高学歴女性を対象とした調査では,「両立コース」を理想とするも，結婚や出産による退職を余儀なくされるケースが多い(井上・江原，2000)[4]。

また，中年期においては，M字形の労働力率の底上げ，つまり中年既婚女性の労働が増加しているという現象が見られており，これまで雇用の場に出にくかった中年期女性を取り巻く条件が変化していることが示唆される。このように，各々にとっての選択肢は増えている。しかし意に反した就職や退職等の決定をせざるを得ないという状況におかれる人，理想と現実にはギャップが見られるという人も多いようである。実際，男性が女性に望むライフコースと，女性が望むライフコースとの間にはズレが見られ，男性は女性に比べて，女性の結婚と出産を希望する割合が高く，さらに“女性が結婚後育児期に家庭に留まる”ことを望む割合が高い(廣嶋，1999)[5]。このように，ライフコースが多様化することは，中年期女性により高い自由度と自己実現の可能性を与えると同時に，葛藤や失望の種にもなるという意味では，両価的である。

C　離婚率の増加

もうひとつ，現代に特有な事象として，中年期や定年退職期の離婚の増加が話題に上るようになった。所謂熟年離婚である。これは1975年あたりからのことであり，以来若年離婚の割合は減り，熟年離婚が高い伸びを示している。離婚率の増加は日本に限ったことではないが，離婚率トップのアメリカは飽和状態を迎え現在は横ばいである。イギリスやフランスに関しても同様の状態が見られる。しかし日本においては90年代に入ってからの上昇が目覚しい。そしてその申し立ては，女性からによるものが圧倒的に多いことも特記すべきである。

ヨーロッパでは家族に対する価値観や規範が変化し，結婚が情緒的な関係となったことが影響しており，アメリカでは女性の労働の増加が一因となっていた。現代の日本の離婚事情はといえば，かつてのそれとは質的に変化してきており，かつては経済的理由がトップであったが，現在最も多いのは性格の不一致である。離婚理由が社会的なものから個人・人格レベルへと移行していることが伺える。また，離婚観も変化してきており，92年では男女とも半数が離婚に賛成・どちらかといえば賛成である。この，離婚許容度の高まりと離婚数の増加の相互作用が，離婚率の上昇に影響していると考えられる(岩井，1997)[6]。

そして，さらに結婚観の変化も関連していることが推察できることも付け加えておこう。女性において，92年から97年の間に結婚観は半数以上が自由主義へと移行しているが，男性は同様の5年間のなかで，依然皆婚主義を維持していた(総理府広報室,1998)[7]。つまり，結婚観において，男性に多く伝統的価値観が残存していることが伺えるのである。結婚の形態自体が多様化しており，同棲も事実婚とする向きや，別居結婚，夫婦別姓といった，いくつものありようが可能になっている現在，夫側と妻側での求めるもののズレを埋めた上でのチョイスは難しい，ということもあるのかもしれない。

D　まとめ

これまで概観したように，中年期女性にとっては，元来乗り越えなければならない危機に加えて，経験する揺らぎは個々によって異なる可能性が高く，また不安定なものである。なかでも，家族サイクルやライフコース，離婚といった問題について多大な位置を占めるのは夫の存在であるから，夫との関係は中年期女性の揺らぎを見る上で欠かすことのできない要因であろうことが推察される。特に，中年期の夫婦では女性側からの離婚の申し立てが増加していることや，関係への不満が妻側から顕著に現れていることは，如実にそれを示す事象であろう。玉谷(1992)[8]が「心理的再婚」といったように，中年期の夫婦関係は危機に直面する可能性が高いため，再び自分たちの夫婦関係を見直すことが大切となってくるのである。とはいえ，夫婦関係をどのように見直し，どのように捉えてゆくことが，中年期女性にとってより福音となるのか，ということは明らかにされていない。また，女性の生活や人格形成全体において夫婦関係がどのような重みをもつのかということについても，一致した知見は未だ得られていない，という現状である。そこで以降においては，現段階で可能な統合を試みる。

2　中年期の結婚・夫婦関係に関する研究の方向性

さて，中年期女性に対し結婚や夫婦関係はどのように影響するものなのか。日本において結婚や夫婦関係に関する研究はかつては驚くほど少なく，90年代後半からようやくなされ始めたという状況だ。ここでは，散見する研究をいくつかの方向性ごとにまとめた上で概観することで，可能な考察を導きたい。

A　家族社会学における夫婦関係研究

心理学領域では研究が微少であるのに対して，家族社会学領域では大きな注意が払われ続けている。そして，その研究結果や指標は少なからず心理学領域での研究に影響を与えている。ここでは，心理学研究を概観する前に，考察の一助となるであろう研究の一端を紹介する。

社会学における夫婦研究はいくつかのカテゴリーに分ける事が出来，大きく分けると，役割構造研究，勢力構造研究，情緒構造研究の3領域である。役割構造研究は，役割期待，遂行，認知，の一致度と妻の就労や子どもの誕生を関連させるものなどであるが，その多くが実態的記述に留まる。勢力構造研究は，夫優位，妻優位，一致，自律の4類型に分類するタイプの研究が多いが，80年代以降みられなくなっている。情緒構造研究は逆に80年代以降増加している。伴侶性，コミュニケーション，結婚満足度等の変数を用いるタイプである（宮坂，1997）[9]。

「伴侶性」に関連して，結婚生活で重視される要因についての研究がある。日本において結婚生活で重視されるものは，「経済的安定」「伴侶性」「子育て」「親密さ」であり，アメリカにおいては「伴侶性」「親密さ」「貞節」である。すなわち，情緒的変数が重視されるアメリカに対し，日本では経済や子育てといった情緒以外の部分も大きいのである。このことは離婚の原因にも反映されている。日本でもアメリカでも同様に「伴侶性」が重視されているかのようであるが，アメリカのそれが行動次元で捉えられているのに対し，日本では情緒次元で把握されているという差異が見られる（森岡・望月，1999）[10]。ただし，近年ではフルタイマーの妻が，会話・レジャーといった行動面での伴侶性を重視しようとする動きがあり，「伴侶性」の意味づけそのものに対しても現代性を反映した議論ができそうである。

また，目黒（1987）[11]が提唱した「個人化」という概念もまさに現代の夫婦に特徴的なものを抽出している。「個人化」とは，「シングル化の進行とか家族生活や共食や協業の減少といった現象を指すラベルではなく，独立した社会的単位としての近代家族がその成立基盤を失うと言う変化過程の方向を明示する概念」である。すなわち，これまでにない夫婦のあり方を指すものであり，離婚の増加とも関連が深いものであるとともに，女性が「自分らしさ」を家庭の中で模索することと非常に関連が深い概念であろう。そして，若年層だけではなく中年期にも見られるものであるとの指摘がある（永久，1997）[12]。この概念は心理学研究において取り上げられることもあり，今後も重要な指標であり続けると思われる。永久（1997）[12]は，日本と韓国の夫婦を対象に，個人化の価値観と伝統的価値観との関連を見ている。価値観得点に夫と妻の間に差はないが，個人化に関係した行動には夫の方が高得点であった。また，専業主婦群の個人化の価値観には，伝統的価値観以外の要因も関わっていることが示唆された。つまり，どれだけ「家事の外部化」ができるか，自由時間がどれだけもてるかと言うことと関連していた。目黒も，「個人化」の深まりと，外部機関への依存，多様化は密接に関連すると述べている。これらが不足すると，家族の揺らぎや崩壊が生じるという。

こういった社会学領域で得られている示唆は，日本文化および現代社会に関する重要な切り口を，心理学領域へ与えてくれるものである。

B　満足度に関するもの

日本の心理学領域における夫婦関係を扱う研究では，満足度を従属変数とするものが増加している。また，前節で述べたように，中年期の妻の満足度が下がっていることを立証するものが殆んどである。菅原ら（1997）[13]の研究によると，とくに結婚生活15年以上の夫婦，つまり多くは中年期の夫婦において，夫から妻への愛情に変化はないが，妻から夫に対する愛情が下がり続けるという結果が得られている。その他の研究からも，妻の方が不満を感じやすい（柏木ら，1996）[14]ことが明らかにされてきているが，その経路に関しては様々である。

最近の研究では，満足度を社会的変数に関連させ帰属させているものが目立つ。柏木・平山（2003）[15]は，中年期夫婦の満足度のギャップに着目し“結婚の現実”という観点で，相思相愛，夫への理解・支持，妻への理解・支持という3次元からの分析を行っている。そして，相思相愛と夫への理解・支持において妻より夫の方が楽観的な認知を行っていること，妻の学歴と経

済的地位がより高いほど，認知が平等になりやすいということを示している。ここで相思相愛は満足度に影響するが残り2変数は影響していなかった。つまり，認知の平等性に社会的変数は影響するが，満足感にダイレクトにつながるわけではない。また，夫からの妻への理解・支持が必ずしも妻の満足度につながらないことから，夫からの理解を得ることは夫が不本意であるとする妻の罪悪感へ繋がるかもしれない，という考察が行われており非常に興味深い。また，平山・田矢・柏木(2003)[16]では，対象は育児期夫婦だがフルタイム就労者において，夫の家事参加が夫への満足度を高めることを明らかにしている。また，専業主婦では育児，パートタイム就労者では情緒と，妻の就労形態毎に夫への満足度を規定する要因が異なることを示唆している。また，平山(2002)[17]では，妻の学歴と収入が高いほど，夫と妻の情緒的ケア度の認知に差がないということを明らかにしている。小泉(1996)[18]によれば，キャリアパターンによって愛情得点が異なっている。妻の夫に対する愛情は，妻が無職である場合に高く，中断後復職し常勤である場合に最も低い。この一連の研究をまとめると，妻の収入・学歴が高いほど夫婦間の認知が平等になりやすいということがいえるが，ダイレクトに満足感にはつながらないといえる。一方で，数井・無藤・園田(1996)[19]は，夫の収入や学歴と妻の結婚満足度が関連していないという結果を導いている。つまり，妻側の社会的要因は妻側の認知に影響するが，夫側の社会的要因は影響することが無い。さらに，夫側はいかなる社会的要因にも影響されること無く生活している。妻の置かれた状況や属性に依存して，妻の夫婦関係満足度が上下しているということになる。

結婚満足度研究の蓄積がある米国を参考にすると，満足度の要因として生活資源評価，役割分担評価，コミュニケーション評価が挙げられる。例えば，サポートの認知とジェンダー観が家事分担と関わり，満足度につながる。サポートに関して，“情緒的サポート”の重要性は日本でも示唆されている（平山，1999)[20]。いくつかの研究において，夫の情緒的サポートが妻の結婚満足度に影響すること，妻の方が夫より夫婦関係から情緒的サポートを得ていると認知しにくいことが示されており，これは妻側の不満を説明する要素として大切である。

先の個人化という概念と結びつけた研究としては，永久(1997)[11]のものが挙げられる。ここでは，個人化の価値観が高いものほど，結婚満足度が高くなっていた。つまり，妻にとって家族の個人化は肯定的な意味を持つことを意味している。

中年期の妻が“不満である”状態に関して，規定因とメカニズムがはっきり解明されてはいない。妻の社会的な属性と，情緒的サポートの認知，個人化等，キーとなる概念が出始めているので，より多様に“夫婦の属性”に依存した研究をするべきであろう。また，ジェンダー観，コミュニケーション評価等の研究，より“中年期”に特化した要因を探る研究は待たれるところである。

C　アイデンティティの形成に関連するもの

中年期のアイデンティティ再構成に関する研究は，岡本(1985)[3]以降漸増している。女性に関するものも中には見られるが，「夫婦関係」に直接焦点化するものはないため，以下では，アイデンティティ形成に関して家庭要因を関連させているものを挙げていく。

堀内(1993)[21]は，40代の既婚女性に対して自我同一性を構成する6領域の変化を調査したところ，専業主婦群において特に希望の喪失が見られたことから，家庭役割をもってしての自我同一性の再構成は難しいと述べている。また，西村(2001)[22]は，中年期女性の中で主婦という制度が違和感を内包されながら維持されていることを示しており，岡本(1997[23])も，「現代は妻・母親役割を通して自己確立感・安定感を得るのは難しく，家庭内役割はアイデンティティの基盤として認識されにくい」と述べている。

また，森川(2000)[24]は，子どもの居ない中年期女性を対象に面接調査を行っており，子どもの居ない女性の同一性の成熟の仕方が様々な可能性を持っていることを示唆している。ここでは青年期の危機をどのように過ごしたかが，中年期の危機の乗り越え方に影響することと，自分なりの価値観を持って親密な関係を持つことが成熟した同一性を形成することも示されている。つまり，家庭要因において何かしら欠けているようであっても，価値観しだいで同一性の確立は可能ということになる。

いっぽう難波(2000)[25]は，中年期の日本女性のライフヒストリー分析を行い，中年期女性は家庭内での関係性の中で自己を確立していく側面もあると述べている。藤田(2003)[26]は，中年期女性のアイデンティティ形成においては，夫婦の愛着における危機が，母子分離へと影響するという側面を持つことを示唆している。

これらをまとめるなら，アイデンティティ再構成において家庭要因は必ずしも主要な要素ではないようだ。しかしこれは，家庭内との関わりがより接近している

者，とくに専業主婦において，家庭という場が危機的な意味を持つということが表現されているのではないか。また，主要な基盤とはなり得ないとしても，家庭要因がアイデンティティの再構成の中で何らかの役割を担うことはいくつかの研究が示すところである。家庭とある程度の距離のある者，また，家庭に対する満足感の高い者，あるいは家庭，夫，子どもとの関係といった視点を細分化し，統合していくような研究が待たれるところである。

D　関係性に基づいたアイデンティティに関するもの

エリクソン(1968)[27]が女性のアイデンティティ形成において内的空間が重要であるとする「内的空間説」を掲げて以来，アイデンティティ研究で対人領域が注目されるようになった。しかし，関係性に基づくアイデンティティは比較的新しい概念である。関係性に基づくアイデンティティは，他者の成長や自己実現への援助といった発達の方向を持ち，女性性や，女性的要因に類似した性質を持っており，とくに中年期以降大切となる(山本，1989[28]；伊藤，1992[29])。なぜなら，中年期において子ども・夫・親との関係が変化し，それを基盤としてアイデンティティをいかに再構成するかということがテーマとなるからである。関係性に基づいたアイデンティティ研究として行われているものは，杉村(1993)[30]のものが代表的であり，この研究では女子青年を対象に，関係性のレベルを高低に分け，家族における葛藤とその解決が重要な意味を持つことを示している。

従来のアイデンティティ研究においても，青年期におけるアイデンティティ形成のあり方が中年期における再構成のあり方と関連することは既に示されていることから，この杉村の研究の内容が中年期にも影響するという見立ては十分に可能であると思われる。「中年期の夫婦」の関係性に基づいたアイデンティティにダイレクトに目を向けたものは残念ながら存在しない。しかしここで，特に注目すべきものとして，宇都宮(1999)[31]の夫婦の関係性ステイタス研究を挙げたい。これは，老年期の夫婦を対象としており，配偶者との関係性を，コミットメントの必要性の認知，コミットメントの2つの基準から捉え，いくつかのステイタスを定義した。ステイタスは関係性達成型・献身的達成型・妥協的関係性型・関係性拡散型・表面的関係性型・独立的関係性型に振り分けられるが，これらは各人において変容可能なものである。そして，相手の人格的な特性への尊重により，より成熟した結婚生活を送ることが出来るという発見をもたらした。

また，宇都宮(1998)[32]は老年期を対象に，回想法による夫婦の関係性発達に関する調査を行っている。そこで，夫婦の関係性発達には，Ⅰ個人の内的危機を認知する段階，Ⅱ個人の内的危機を夫婦関係の問題として位置付ける段階，Ⅲこれまでの夫婦関係を見つめ直す段階，Ⅳ夫婦関係を修正・向上させる段階，Ⅴ人格

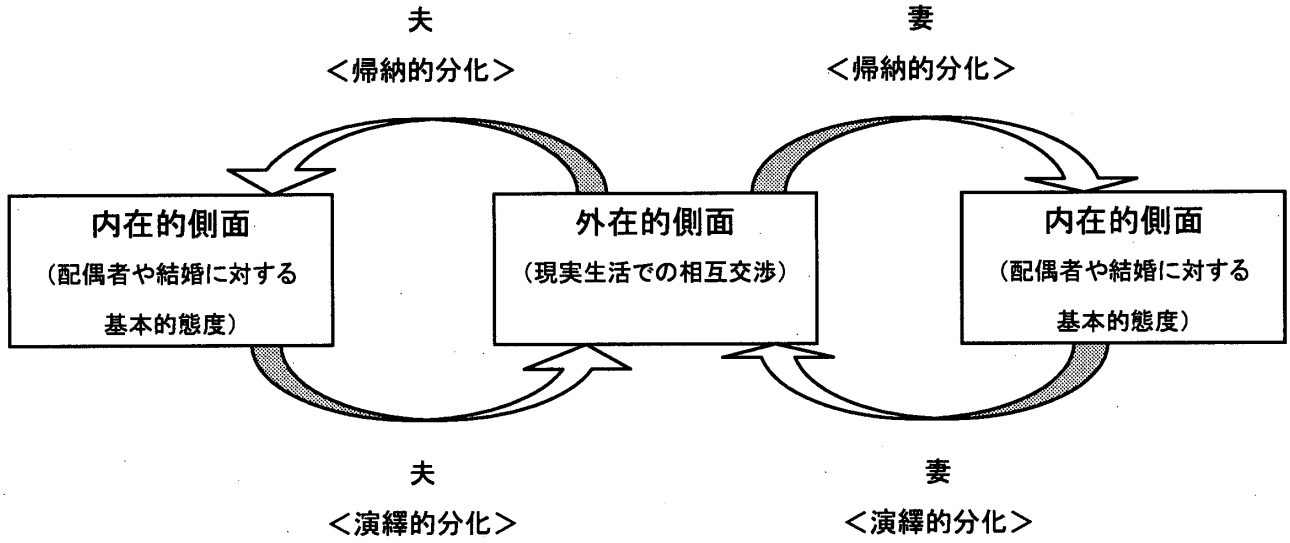

図2　相互関連モデル　宇都宮(1999)より

的関係としての安定とそれにもとづく積極的関与の段階という5つの段階があり，重大なライフイベントにより成熟・発達していく方向性が示唆されている。さらに，宇都宮(1999)[31]は，夫婦の関係性は，配偶者や結婚に対する基本的態度，いわば内在的側面と，現実生活での相互交渉，いわば外在的側面が相互に影響しあう循環的プロセスであると考え，相互関連モデルを提示している(図2参照)。宇都宮によるこれらの研究及び考察をまとめれば，夫婦という関係性にもとづくアイデンティティは，形成されるまでに夫・妻相互の内面及び外面における円環的な認知を繰り返して深められていく。そして，その関係性自体も時期を経るごとに変容していく非常に力動的なものである。また，これは中年期夫婦を対象にしたものではないのであるが，ステイタスの発案により，中年期夫婦における様相を実証的に探る足がかりを与えてくれたものとして非常に意義深い。

E　まとめ

パートナーとの関係性は，女性のアイデンティティ発達にとって，励まし，サポートとなる(岡本，1996)[33]ことからも，中年期既婚女性のアイデンティティ形成に，結婚・夫婦関係は大切であるという仮説は立てられる。しかし，家庭内要因が中年期女性のアイデンティティ形成に及ぼす影響の程度に関しては，一致した見解がないため，夫婦関係そのものが中年期女性に及ぼす影響もまた特定は出来ない。これまで明らかになっていることをまとめれば，成熟した関係を築くためのコミットメントに影響を与えるであろう一つの要因に夫婦関係満足度をあげることが出来，その夫婦関係満足度は情緒的サポートや妻側の属性が規定する可能性があることがいえる。そして，そこに，コミュニケーション，ジェンダー・イデオロギー，など様々な要素を組み込むことは今後の課題となる。そして，これらすべてを含んだ夫婦の関係性のありようは，夫婦相互に体験するライフイベントに応じて成熟・発達していく可能性を持っている。社会学領域において，フルタイム就労群の妻が行動面での伴侶性を重視し始めているという示唆があるように，妻の就労状態，およびコホート毎の“夫婦のありよう”が変化している可能性があることも，同時に示唆されよう。

3　今後の課題

これまでのレビューを受け，既にレビュー内で言及した箇所もあるが，今後必要とされる研究をいくつか挙げていく。先ず一つ目は，満足度を規定する潜在変数に関するものである。また，満足度はあくまでコミットメントの下位とも言える変数であるから，そもそも「満足度」とはなんなのか質的に迫る必要もある。満足度は単一の指標で測られることもあれば，複数の因子をもつ尺度で測られることもある。

また，中年期の夫婦関係そのもののあり方を明らかにする必要もあるだろう。宇都宮の“夫婦の関係性ステイタス”という概念は夫婦関係のありようを把握する際に非常に役立つ概念である。しかしながらこれは老年期夫婦を対象に行われた研究で得られた結果であるから，中年期を対象としてその特徴を抽出する必要もある。また，ジェンダー・イデオロギーが夫婦関係に影響することがアメリカでは明らかになっているが(ベルスキー＆ケリー，1996)[34]，日本での影響はあまり明らかになっていない。夫婦関係が夫や妻自身の精神的健康に与える影響や，子どもに与える影響が大きなものであることは臨床における事例研究でも示されていることであるが実証は殆どされていない。また，夫婦関係そのものが中年期女性へどのような重みを持って影響するのかということを，今後も絶えず研究して行かねばならない。

ほか，今後の課題として特に着目したい点をこれまで議論してこなかった部分から二点挙げ，以下に述べる。二点とは，質的研究の必要性と，文化的要因を探る必要性である。

A　質的研究の必要性

概観してきた夫婦関係研究はその殆どが量的研究である。特に満足度に関連するものは，満足度尺度や，愛情尺度，あるいは主観的な満足度得点等で測られているものが多い。つまり，個人を対象にした質的研究の少なさは指摘されるべきところである。結婚や夫婦に関する研究，すなわち関係性に関する研究は，様々な家庭環境やライフコース，パーソナリティをも考慮できるような，細やかなアプローチが重要な領域であるからだ。しかし日本独特の，夫婦のことは表に出すものではないといった風潮が，細やかな，悪くいえば侵襲的な質的アプローチを阻んできたきらいがある。これまで言及してきたような，多様な視点を盛り込むためには質的なデータは非常に有効である。また，対象とする属性を細分化し，その中におけるメカニズムを特定するさいにも，質的なデータが果たす役割は大きい。だからこそ，倫理的問題を熟慮した上での，綿

密な質的アプローチが今後とても大切になってくるのではないか，と考える。

B　文化的要因を探る必要性

アメリカは離婚件数トップを保持してきた国であり，故に離婚研究を含めた夫婦関係研究の数は群を抜いている。実験室や行動観察を用いた研究も量産されており，例えば長期的に関係の悪化を予測するようなコミュニケーション・パターンのモデル化がなされていたり(Gottman, 1994)[35]，将来の満足度を予測する変数を明らかにしたり(Gottman & Krokoff, 1989)[36]している。また，夫婦間で不満をつのらせやすいのは妻の方であるという結果があり，これは日本における菅原ら(1996)[13]の研究と同様の知見である。しかし日本独自の文化を無視したかたちで考察に結びつけることは危険であろう。

文化差に関して，夫婦関係そのものに着眼した研究は見られないが，松下(1999)[37]は，留学生を対象に「女性の生き方」の文化差に関する研究を行っている。日本においては仕事も家庭も，という生き方への志向が強いが，諸外国では異なった志向性を持っている。例えば，韓国では儒教の影響が強く，日本より更に強い家庭との結びつきを求められる。一方中国では職業的達成に関する意識が非常に高く，女性と男性がほぼ同様のライフコースをたどる。フランスでは80年代に男女平等が達成され，男女に差がないという状況だ。つまり，日本においては，韓国ほどではないにせよ，「女性」であることと「家庭」へのしがらみを抱きながらの生活を強いられるということになる。これはいくつもの葛藤を抱えることに他ならない。例えば,「手作り」こそが日本の家庭における女性のアイデンティティであるという伝統は今なお存在している。「妻」「母」は手をかけ家事をするべきと言う信念は日本においてひときわ強いのだが，しかしそれは実際の家事労働時間を増幅するため，実質的な関わりの時間を減らすと言うパラドックスがある(牟田，1997)[38]。

また，日本においては，感情表出を抑制することがより好ましいという文化的規範があるため，夫婦関係を含め家族内での情緒表現は欧米に比べかなり抑制的であるという指摘もある(森岡・望月，1999)[10]。つまり，欧米における夫婦コミュニケーション研究からの理論を日本には援用できないことは明らかである。社会学領域で議論されている前述の「伴侶性」に関する日米の文化差も，欧米の夫婦研究を日本に輸入し難くしている。

このような，日本の文化を組み込んだ上での研究，すなわち「結婚・夫婦関係が中年期女性にどのように影響するか」の比較研究も今後なされていくことが望ましいと考える。そもそも日本における夫婦関係研究数の少なさが，日本文化を表す一端でもあろう。日本に於けるコミュニケーション・パターンや独自の変数を調査する必要もある。

これらを踏まえると，今後は結婚・夫婦関係に関する，よりきめ細やかな質的研究と，日本に残存する伝統的価値観や日本文化を反映させた研究が必要性であることが指摘できる。また，個人の属性により配慮した調査，すなわち夫婦関係に重きを置かない人，または夫婦関係が上手くいっていない人に関して，子どもや職業生活，他社会的活動の位置づけを調べる必要もある。勿論，非婚女性や子どものいない女性，そして男性側からの研究の蓄積も望まれるところである。これらの要素に関して網羅的かつ綿密なアプローチが出来てこそ，やっと夫婦関係の意味するものの全貌が見え，さらにそれが女性のアイデンティティ形成に与える影響も見えてくるであろう。

(指導教官　下山晴彦助教授)

引用文献

1)岡本裕子　1999 『女性の生涯発達とアイデンティティ』 北大路書房

2)菅原ますみ・詫摩紀子　1997　夫婦間の愛情関係に関する研究(1)〜(3)　日本発達心理学会第 8 回発表論文集

3)岡本裕子　1985　中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究，33，295-306.

4)井上輝子・江原由美子　2000 『女性のデータブック第 3 版』 有斐閣

5)廣嶋清志　1999　目黒依子・渡辺秀樹(編) 『講座社会学　2 家族』 東京大学出版会

6)岩井紀子　1997 『現代家族の社会学—脱制度化時代のファミリー・スタディー』 石川実(編)　東京大学出版会

7)総理府広報室　1998　男女共同参画社会　月刊世論調査30-4.

8)玉谷直美　1992　女性における中年期の危機・意味・課題　氏原寛(編)『中年期のこころ』 培風館

9)宮坂靖子　1997 『現代家族の社会学—脱制度化時代のファミリー・スタディ』 石川実(編)　東京大学出版会

10)森岡清美・望月高　1999 『新しい家族社会学』 培風館

11)目黒依子　1987 『個人化する家族』 頸草書房

12)永久ひさ子　1997　家族の個人化：妻を中心として(1)日韓比較研究　日本発達心理学会第 8 回発表論文集

13)菅原ますみ・小泉智恵・託摩紀子・八木下暁子・菅原健介　1997　夫婦間の愛情関係に関する研究(1)〜(3)　日本発達心理学

会第8回発表論文集
14)平山順子・柏木恵子 2001 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究，12(3)，216-227。
15)柏木恵子・平山順子 2003 結婚の“現実”と夫婦関係満足度の関連性—妻はなぜ不満か— 心理学研究，74(2)，122-130。
16)平山順子・田矢幸江・柏木恵子 2003 育児期夫婦の配偶者満足度を規定する要因—妻の就労形態別の検討— 発達研究，17，69-85。
17)平山順子 2002 中年期夫婦の情緒的関係：妻から見た情緒的ケアの夫婦間対象性 家族心理学研究，16，2，81-94。
18)小泉智恵 1996 夫婦間の愛情関係に関する研究(1)～(3) 日本発達心理学会第8回発表論文集
19)数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究，7，31-40。
20)平山順子 1999 家族を“ケア”するということ—育児期女性の感情，意識を中心に— 家族心理学研究，13，29-47.
21)堀内和美 1993 中年期女性が報告する自我同一性の変化：専業主婦，看護婦，小・中学校教師の比較 教育心理学研究，41，11-21。
22)神原文子 1991 『現代の結婚と夫婦関係』 培風館
23)岡本裕子 1997 『中年からのアイデンティティ発達の心理学』 ナカニシヤ出版
24)森川早苗 2000 子どものいない女性の同一性の研究—中年期の同一性地位に関する一考察— 家族心理学研究，14(1)，1-13.
25)難波智子 2000 中年期の日本女性におけるライフヒストリー研究 社会心理学研究
26)藤田綾子 2003 中年期女性の自我同一性研究Ⅲ—家族文脈における危機要因— 教育学科年報，29，1-6。
27)Erikson, E. H. 仁科弥生(訳)1977 幼児期と社会1・2 みすず書房
28)山本里佳 1989 「自己」の二面性に関する一研究：青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討 教育心理学研究，37，302-311.
29)伊藤美奈子 1997 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房
30)杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究，9，45-55。
31)宇都宮博 1999 岡本裕子(編) 『女性の生涯発達とアイデンティティ』 北大路書房
32)宇都宮博 1998 高齢期における配偶者との関係性と夫婦人生の移行過程の検討 広島大学教育学部紀要第二部，47，163-172.
33)岡本裕子 1997 『中年からのアイデンティティ発達の心理学』 ナカニシヤ出版
34)ベルスキー，J.・ケリー，J. 安次嶺佳子(訳)1995 子どもを持つと夫婦に何が起こるか 草思社
35)Gottman, M, G. 1994 What predicts divorce? Erlbaum.
36)Gottman, M, G. & Krokoff, L. 1989 Marital interaction and sadisfaction: A longitudinal view. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* 57, 47-52.
37)松下美知子 1999 岡本裕子(編) 『女性の生涯発達とアイデンティティ』 北大路書房
38)牟田和恵 1996 『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』 新陽社